朝日新聞
DIGITAL

（みちのものがたり）いろは坂　栃木県日光市　その先に、息をのむ光景

２０１６年５月１４日０３時３０分

アーネスト・サトウ由来の旧英国大使館別荘２階広縁からは中禅寺湖が一望できる＝栃木県日光市

車のタイヤをきしませながら、何度もハンドルを切る。小学校時代、大型バスに乗ってこの急カーブを曲がるたび、級友と一緒に興奮して歓声をあげたことを思い出す。標高差は４４０メートル、上り坂の延長は９・５キロ。中禅寺湖のある奥日光まで２０分ほどのドライブだった。

栃木県日光市のいろは坂。

「いろは４８文字」にちなんで名前を付けたのは、当時、この坂にあったケーブルカー「日光登山鉄道」に勤め、後に所長になった加藤彰なる人物だったという。日光の歴史に詳しい福田和美さん（６７）によると、加藤は元軍人で、俳人高浜虚子に師事。１９３８（昭和１３）年ごろ、４８カ所のつづら折りの数を際立たせたいと考案した。ケーブルカーのアナウンスによって、いろは坂の名は、たちまち世間に広まったとされる。

もっと昔、奥日光・男体山は修験道の聖地だった。明治の世を迎えた頃でも、中禅寺湖畔には、夏場のみ営業する参拝者向けの茶屋が６軒ほど立ち並ぶばかり。ふもととつなぐルートは修験者がたどった狭くて険しい山道だけで、中禅寺坂と呼ばれていた。

１８７２（明治５）年３月、まだ雪が残るこの寂しい山道を、奥日光を目指して歩く外国人青年がいた。後に駐日英国公使となる書記官アーネスト・サトウ（１８４３〜１９２９）だ。

＊

１４４年後の４月上旬、郷土史家小島喜美男さん（６６）の案内で、サトウも歩いたと思われる古道をたどった。

登り口に「馬返（うまがえし）」とある。かつてここから先は、馬から下りて、身一つでよじ登っていかねばならなかったのだ。

「足場が危ういから気を抜かないで」。小島さんについていくだけの記者。ミズナラやクロブナの立ち木に手をかけ、足を踏ん張り、道なき道をはい上がる。汗が噴き出し、息があがる。「これじゃ、いろはに『ほへと』ならぬ『へとへと』ですね」。自分で口にしたダジャレのつまらなさに、一層消耗する。

サトウはこの道をその後も何度も往復している。何を好きこのんで？　思わず疑問が口をつく。小島さんが答えてくれる。「険しい坂の先に箱庭のような息をのむ光景が迎えてくれたからですよ」

すぐに納得した。

斜面が終わり、林を抜けると、男体山のすそでブルーの水をたたえた中禅寺湖が、目の前に広がっていた。その景色を見たとたん、疲れが吹き飛ぶ気がした。

■夏は外務省が日光に移る？

１８７２年、奥日光を旅した後、サトウは英字新聞に日光案内記を連載した。３年後には英文では初の『日光ガイドブック』（ジャパン・メイル社）を出版。すでに有名だった箱根を引き合いに、中禅寺湖をこう絶賛している。

「箱根の湖よりずっと絵のようにうつくしい」

外国人として奥日光観光の口火を切っただけでなく、ほかの外国人に、その魅力を伝える役割も担った。

それに応じ、多くの外国人が奥日光を訪れ、魅了されたことは、様々な文章から今に伝わる。たとえばベルギー公使夫人メアリー・ダヌタンは、アルプスの名勝を連想したと日記に書き留めている。「イタリアのコモ湖の風景が私の心の中に浮かんできた」

中禅寺坂も徐々に整備され、交通手段は徒歩や山かごから馬、人力車へ進化。１８９０（明治２３）年には、東京から日光まで鉄道が開通した。この前後に、現在のいろは坂の原型となるつづら折りの新道も開かれた。やがて各国の外交官たちがこぞって湖畔に別荘を構え、最盛期には４０戸ほどに達したといわれる。

この湖畔の外交官らの別荘ブームを先導したのもサトウだった。日本を一時離れた後、９５年に全権公使として１２年ぶりに赴任したサトウは翌年、最も眺望が良い湖の南岸に別荘を建てた。英国人法律家に続く別荘だった。この公使時代の約５年間に、サトウは奥日光を３１回訪れ、滞在期間はのべ２１８日に達した。

「アーネスト・サトウ公使日記」から、別荘での一日をのぞいてみよう。

「ビショップ夫人（イザベラ・バード）と一緒にダヌタン（ベルギー公使）家へ昼食に行くと、ウォルター夫人（商社の副支配人夫人）とフレイザー夫人（前英国公使夫人）も来合わせていた。彼ら全員を誘って、うちでお茶をする。そのあとでラウザー（英国公使館員）とカロ（スペイン大使館書記官）と一緒にボートに帆を張って、カロの家の方向に走らせた」

国籍も様々な人々が集う社交場ぶりがうかがえる。そうしたにぎわいを表現する有名なフレーズもある。「夏は外務省が日光に移る」。県が作成した観光ポスターにも使われた。日本の外交が栃木県の山奥で繰り広げられていたとは。確かに想像力をかき立てられる言葉だ。

＊

実際には、公使日記をみても、東京での公務中のように日本の要人と会った形跡は見当たらないそうだ。日光を訪れた外国人に詳しい駒沢女子大の井戸桂子教授は「各国から集まった親しい友人たちとの社交を楽しんでいたのでは。サトウも通訳官として幕末明治維新に立ち会った若いころと違い、英国の全権代表としてゆとりをもち、大好きな植物観察や登山を満喫できたはず」とみる。

調べてみると、「外務省」の言葉の出どころは、『日光避暑地物語』（１９９６年、平凡社）の中の一節に見つかった。「ピゴットが残した言葉どおり、まさに『夏場は外務省が日光に移る』」

著者は、「いろは坂」の由来を教えてくれた福田さん。実はそのくだり、訂正が必要と打ち明ける。「英国大使館武官のピゴットが言ったというのは私の勘違い。キャッチコピーとなって一人歩きしてしまったのが真相です」

サトウの物語に戻そう。

中禅寺湖に浮かべたボートに初老の男と、学生服の青年が乗った一枚の絵が残っている。サトウは日本人女性の武田兼と結婚し、２男１女をもうけた。描かれた二人は、サトウとその次男の姿だ。

日本の後、清国の公使に転任したサトウは１９０６（明治３９）年、その職務を終えて英国に戻る途中に立ち寄ったのが、最後の日本訪問となった。船が出航延期になると、サトウは次男と連れ立ってつづら折りを登り、奥日光に向かった。絵はその１シーンだ。

次男とは、日本山岳会の創始者の一人として知られる武田久吉（ひさよし）（１８８３～１９７２）。サトウの勧めで英国へ留学して博士号を取り、尾瀬の高山植物保護に力を尽くして、「尾瀬の父」とも呼ばれている。

「父は周囲の好奇な目から私たちを守ろうと英国人だった祖父の話を一切しなかった」。そうふり返るのは、久吉の次女の林静枝さん（８６）だ。自分が外国人の孫であることを知ったのは、大学時代に戸籍を取り寄せてから。その後で母に、祖父が奥日光を愛した英国外交官だったことなどを教えられた。

「サトウが険しい中禅寺坂を何度も往復し、山歩きと植物採集への情熱を傾けたことは、父にしっかりと受け継がれていたのですね」

（文・進藤健一　写真・堀英治）

■今回の道

いろは坂は、日光市中心部と奥日光を結ぶ。明治から昭和初期にかけ、各国の外交官らが中禅寺湖畔に避暑に訪れ、別荘を相次いで建設するなど、人の往来とともにつづら折りの道が整備されていった。現在の「第一いろは坂」は１９５４（昭和２９）年に、６５（昭和４０）年には上り専用の「第二いろは坂」が完成した。

奥日光に生まれた国際的な社交場は、大恐慌やナチスの台頭などが影を落とし、第２次大戦前に姿を消した。

アーネスト・サトウの祖先は、現在のドイツ・ヴィスマール北東のサトウ（Ｓａｔｏｗ）村付近の出身。つまり「佐藤」姓とは関係ない。１９歳の若さで攘夷（じょうい）運動まっただ中の日本の地を踏み、外交官を引退して英国に戻るまで通算約２５年間、日本で暮らした。日本語が堪能で、討幕派の西郷隆盛らと会談、幕臣の勝海舟らにも会い、政治情報を収集するなど激動の幕末維新を奔走した。「幕末に無署名で発表した『英国策論』は、天皇を元首とする諸大名の連合体が支配権力の座につくべきだと主張する個人的な見解だったが、討幕派に注目された」と日本女子大の吉良芳恵教授。写真は横浜開港資料館所蔵。

■ぶらり

奥日光には、ＪＲ日光駅か東武日光駅から東武バスが便利。第二いろは坂を上って、中禅寺湖畔の二荒山神社前まで約１時間の道のりだ。遊歩道を徒歩１時間１５分ほどかけて中禅寺湖機船の菖蒲ケ浜遊覧船発着所（電話０２８８・５５・００５１）を目指そう。途中の西六番園地は、長崎のグラバー邸で知られるトーマス・グラバーの別荘跡地。後にクラブハウスとして外交官たちが集った。当時の石製の暖炉と煙突が残る。

遊覧船で対岸の立木観音へ。徒歩１０分のアーネスト・サトウの別荘はその後、英国大使館の別荘として使われた。２０１０年に栃木県に譲渡され、７月には英国大使館別荘記念公園がオープンする予定だ。２階からの眺めは絶景。近くにはイタリア大使館別荘記念公園も。杉皮張りで仕上げられた内外装が美しい。両公園は、共通観覧料（高校生以上３００円）で見学できる予定。

ここまで来たら、華厳の滝に足を延ばしたい。一気に９７メートルを落下する壮大な滝で、日本三名瀑（めいばく）に数えられる。奥日光の成り立ちを知るには隣接する日光自然博物館（電話０２８８・５５・０８８０）へ。高校生以上５１０円。

腹ごしらえは、船の駅中禅寺近くのそば店「新月」（電話０２８８・５５・００７４）の冷やしゆばそば（税込み１２５０円）がおすすめだ。

■読む

『碧（あお）い眼に映った日光　外国人の日光発見』（井戸桂子著、下野新聞社）は、いち早く日光の価値に気づき、その魅力を世界に知らしめた外国人たちを、写真と共に詳しく紹介している。第６回ふるさと自費出版大賞受賞作。

『遠い崖　アーネスト・サトウ日記抄　全１４巻』（萩原延壽著、朝日文庫）は、サトウの残した日記や公文書、手紙など埋没していた膨大な資料をもとに、幕末から明治にかける動乱の日本を描き出した。その多彩な活躍ぶりから著者はサトウを「人生の健脚家」と評している。

■読者へのおみやげ

日光自然博物館の消音機能付き特製「熊よけ鈴」を６人に。住所・氏名・年齢・「１４日」を明記し、〒１１９・０３７８　晴海郵便局留め、朝日新聞ｂｅ「みち」係へ。１９日の消印まで有効です。

◆次回の道は、東京都足立区の荒川土手です。人気ドラマ「３年Ｂ組金八先生」シリーズのロケ地として知られています。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.